メリ～でぇす！

めるりさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メリ～でぇす！

【Ｎコード】
Ｎ１０７２Ｗ

【作者名】
めるりさん

【あらすじ】
版権ギリギリ。タイトルの意味が分かる人はすごいです。
何番煎じか知りませんが、投稿。いわゆる息抜きです。

午前二時半。不意に携帯電話から着信音が鳴り響く…
「私、メリーさん。今あなたの後ろに――」
「いやだぁぁぁぁぁあ！！」
「……」

「仕事、だりい…」
朝から開口一番にやる気のない声を一人きりの部屋に響かせるのは俺こと結城（ゆうき）　空（そら）。地元の小中高を卒業し、大学を出て、ちょっといい企業に就職したそこらへんに居るサラリーマンだ。
一言に嫌だと言っても一人暮らしの自分では働かないと着る住むはおろか、食っていけない。肉体労働というわけではないが、毎日毎日ご機嫌伺いに上手くやっても褒めてはくれないパソコンと向かい合う日々は肌寒いこの季節と相まってそこそこにくるものがある。
ピピピピピピピピ……
携帯電話のアラームが起きなければいけないと急かしてくる。
「へいへい…」
止めている最中にふと思う。そろそろこの無機質な音にも自分で作る飯のように飽きがまわってきた。
携帯電話を止めた後はいつも通り昨日の晩飯の残り物にパンか冷凍飯がお決まりで、さっさと平らげ、スーツに身を包む。着始めたころは引き締まる感覚にやる気が触発されたものだが、慣れとは怖い。

「おっす、結城！」
自分と違い、朝一番から元気な同僚、北条（ほうじょう）がネクタイ片手に挨拶をしてくる。
「おう、北条。たまには家でネクタイ締めてこいよ」
「仕方ないだろ、昨日は二時まで合コンだったんだから。お前も来ればよかったのによ…」
「仕事疲れを癒すには睡眠が一番なんだよ」
半分嘘だ。彼女を持ちたいという気持ちもあるが、結局どっちつかずで終わっている。その点でいえばこいつは自分よりも出来がいいのかもしれない。
「おカタイね。こんな奴の彼女は大変だろうな～」
「ありきで考えんなよ。それよりも、結婚考えるんならもうちょっと残業したらどうだ？」
「冗談だろ？結婚はおいても、今遊ばないといつ遊ぶんだよ？」
「俺は老後にとっとくよ。何かといやな時代だし」
「爺くさい人生だこと…」
「ほっとけ」
なんだかんだで結局はこいつが一番馬が合う同僚だ。新人の頃からのし上がろうとも思わないし、割と面倒見はいい。もう少し真面目ならモテるのかも知れない。
「そういえばさ…」
「なんだよ？急に静かに…」
こういう時のこいつの話はマジなものが多いので気持ち少し身構えてしまう。

「怪談話でメリーさんって知ってるよな？」
「ああ。電話か何かでどこに居るか伝えて、どんどん近づいてくるって都市伝説だろ？」
誰だって一度は聞いたことはある。その上で殆ど全員が信じていない話だ。
「いや、それがマジなんだって。隣町で一人失踪、着信履歴がメリーさんだったって噂だぜ」
「はぁ…んなもんがあるんならいつでも掛けてこいって話だ。さっさと給料分は働くぞ、今リストラされたらお前のせいだからな」
くだらない…小学生でもビビらない話だ。どうせ一週間後には暴力団か何かが――で終わりそうな話だ。
「着信履歴の話はマジなんだけどな…」
「なんか言ったか？」
「いや、別に～」
今日も今日とてデスクワークにお茶くみ、雑用…“楽しい”仕事だ。

プルルルルル…
「ん？」
俺の携帯電話が鳴った…おかしいな、マナーモードにしてた筈なんだが…仕方がないのでデスクから離れて電話に出る。
「もしもし？今仕事――」
「私、メリーさん。今地球の裏側に居るの」
ブツッ…
電話をかけてきたメリーさん、あんたの頭は宇宙の果てにあるん

じゃないのか。平日の昼前からいたずら電話なんてどんだけ暇人なんだよ…
プルルルルルル…
また…今回は表示を見よう……【メリーさん】だと…とりあえず無視もなんなので出てみる。
「私、メリーさん。今北海道に居るの」
ブツッ…
スゲーな。地球の裏側から二十秒くらいで北海道か…遅刻しないで済むな…
プルルルルルル…
「私、メリーさん。今青森に居るの」
ブツッ…
海峡を泳いだのか…それとも、フェリーか…
「おーっす。彼女とＴＥＬか？」
「いや、新手のイタ電だ。今週の休みに番号変えてくるわ」
プルルルルルル…
「私、メリーさん――」
ブツッ…っと。他人の旅の報告なんかされてもめんどくさい。
プルルルルルル…
「私、メリー――」
ブツッ…
プルルルルルル…
「私――」
ブツッ…
プルルルルルル…
「聞いてよ！やっと沖縄まで行ったんだから！」
意外と可愛らしい声だな…イタズラ電話にしては珍しいクオリティだ。しかし、さっきの間で面白い現象が起きた。
「俺ん家千葉な。つうか、素通りしたんならもう掛けてくんなよ」
メリーさんって住所知らなくても電話かけるんだな…

「今、熊本に……あの、千葉ってどっちに行けばいいですか…」
ブツッ…
一つの国っていっても割と広いので今日中はメリーさんに楽しませてもらえそうだ。

楽しいことが起これば時間は早く過ぎていくもので会社は定時で帰って今は携帯電話片手に寝そべってメリーさんの活動報告を聞いている。
「あのね、駅まできたの！」
プルルルルルル…
「貴方の住民票は教えてもらったから！」
プルルルルルル…
「玄関に立ってて…」
プルルルルルル…
「犬が！犬…きゃぁぁあ！！」
プルルルルルル…
「ぐず…家の前まで来たもん…なんで玄関に居ないの？」
「いや、普通居ないだろ。鍵掛かってないから入れよ」
ブツッ…
プルルルルルル…
「私、メリーさん。今あなたの後ろに居るの」
「っていうと、床下？」
幸運にも今借りているアパートは一階だ。そんでもって今、俺は仰向けで寝ている。ドンドンと床が叩かれる音がするが、気にしない。あぁ…眠くなってきた……

プルルルルル…プルルルルル…プルルルルル…
どうやら寒さに負けて暖房をつけたのが理由で寝てしまったようだ。暖房があるのでぬくぬくリラックスしながら電話に出る。
「ん？あ、もしもしメリーちゃん？」
「寒いよ…」
ふざけきった自分の声と反比例するように寒さに震えた弱弱しい声がかすかに聞こえる。ちょっとやりすぎたか？
「なぁ、メリーさんって、人殺すのか？」
「殺さないよ…生き物がいつ死んだっておかしくないよ」
「そりゃそうだ。ところでな…俺、寝返りうってみたんだけど」
ブツッ…
プルルルルル…
「もしもし？」
しかし、受話器から声は聞こえない。代わりに背中に冷え切った何かがもたれかかってくるのが分かる。暖かい部屋に居たのだから当然だけど…
「私、メリーさん…今、あなたの後ろに居るの」
「俺、二度寝したいんだけど」

「お嬢さん、お名前なんていうの？」
俺は気まぐれに彼女の名前を呼ぶ。

「私？メリー、今あなたの隣に居るの。これからも…ね？」
そうそう、今付き合ってる彼女はちょっと方向音痴だ。勿論ゴールを過ぎても手を引き続けるよ、じゃないと…おっと、今度はエジプトかな…

（後書き）

「自分の方が先に入れたぞ犬っころ！」っていう人はいつでも連絡してきてください。消しますので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1072w/

メリ〜でぇす！

2011年10月7日22時23分発行